

昭和音楽大学

指揮者ダニエーレ・ルスティオーニ  
オペラ歌手のためのマスタークラス

MASTERCLASS DI CANTO LIRICO

*Maestro*

*Daniele Rustioni*

2018.6.2(土) 19:00

昭和音楽大学 テアトロ・ジューリオ・ショウワ

Teatro del Giglio Showa

主催：昭和音楽大学

後援：イタリア大使館



協力：公益財団法人東京都交響楽団

---

昭和音楽大学  
指揮者ダニエーレ・ルスティオーニ  
オペラ歌手のためのマスタークラス

MASTERCLASS DI CANTO LIRICO  
Maestro Daniele Rustioni

---

講師：ダニエーレ・ルスティオーニ  
Daniele Rustioni, lecturer

オーディション & レッスン：カルメン・サントーロ  
Carmen Santoro, audition and preparations for singers

イタリア語通訳：菊池 裕美子  
Yumiko Kikuchi, interpreter

客席内では、携帯電話、スマートフォンなどは電源をお切りください。  
開講中の撮影、録音、録画はかたくお断りいたします。  
補聴器をご使用の方は、機器が正しく装着されていることを今一度確かめください。

ダニエーレ・ルスティオーニ  
Daniele Rustioni



photo Davide Cerati

2014年6月よりトスカーナ管弦楽団首席指揮者を務め、2017年9月からフランス国立リヨン歌劇場の首席指揮者に就任。2010年9月ミラノ・スカラ座にデビュー。2011年3月ロイヤル・オペラハウス・コヴェントガーデン（ロンドン）にデビュー以来、定期的に客演。ミラノ・ヴェルディ音楽院、シエナ・キジアーナ音楽院、英国王立音楽アカデミーに学ぶ。35歳のルスティオーニは管弦楽、オペラの両分野において彼の世代で最も目が離せない指揮者の一人である。

1983年ミラノ生まれ。リヨン歌劇場ではブリン『戦争レクイエム』、ヴェルディ『マクベス』《ドン・カルロ（5幕版）》『アッティラ』などの上演が話題を呼んだ。これまでにバイエルン州立歌劇場、トリノ・レージョ劇場、フェニーチェ劇場、オペラ・バステイユ、メトロポリタン歌劇場、チューリッヒ歌劇場などに登壇。またサンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団、ロンドン・フィルハーモニック、アルメニア国立交響楽団、バイエルン国立管弦楽団、アイルランド国立交響楽団、BBC交響楽団などを指揮。

2014年に日本デビュー、これまでに九響、東響、大阪フィルを指揮。また東京二期会オペラ劇場『蝶々夫人』《トスカ》（ともに管弦楽／東京都交響楽団）に登壇した。東京都交響楽団の定期演奏会には2017年2月（『幻想交響曲』ほか）に続いて、本年6月4日に2度目の登壇を果たす（R.シュトラウス『イタリアより』ほか）。



カルメン・サントーロ Carmen Santoro

イタリア・マルティーナ・フランカ生まれ。これまでにチューリッヒ歌劇場、ソフィア王妃芸術宮殿、アンデア・ウィーン劇場、ボリショイ劇場、ボローニャ劇場、ナポリ・サンカルロ劇場、ロッシェニ・オペラ祭、ヴァッレ・デイトリア音楽祭などにコレペティトゥアとして関わる。また英国王立音楽大学、チューリッヒ・オペラスタジオ、ボリショイ劇場の若いアーティストのためのプログラムなどでヴォーカルコーチとして指導に当たる。昭和音楽大学より10年間にわたり招聘。現在、バルマ音楽院、英国王立音楽アカデミーで教鞭をとるほか、2012年よりチューリッヒ歌劇場およびフィレンツェ五月祭で指揮者ファビオ・ルイージ氏のアシスタント、ヴァッレ・デイトリア音楽祭アカデミーディレクター兼芸術監督アシスタントを務める。

# 「オペラ劇場の現在～2018」

Opera Theatre of Today ～ 2018

石田麻子

Asako Ishida, Ph.D

## 1. 人材は国境を越える

本日のマスタークラスには、イタリア生まれの若手指揮者ダニエレ・ルスティオーニ<sup>1</sup>を迎える。彼は2017/2018シーズンからフランス国立リヨン歌劇場の首席指揮者の任に就いたばかり。同ポストの前任者は新国立劇場の次期オペラ部門芸術監督の大野和士<sup>2</sup>である。ルスティオーニは、ほぼ同世代のバッティストーニ<sup>3</sup>、マリオッチ<sup>4</sup>と共に、「イタリア若手指揮者三羽鳥」と称される。オペラの世界で着実に実績を重ねている彼らは、どのような環境で活動しているのだろうか。オペラ劇場にみる現在のトレンドを、グローバル化と人材育成の視点で見えてみよう。

### 1-1. オペラ劇場を率いる人材のグローバル化

リヨン歌劇場はスタジオーネ<sup>5</sup>によるシーズン制をとる。ドイツ語圏を中心としたオペラ劇場のレパートリー・システム<sup>6</sup>とは異なっている。現インテンドント<sup>7</sup>は、ベルギー出身のセルジュ・ドルニ<sup>8</sup>。リヨン歌劇場に着任した2003年以来、定期会員の増加<sup>9</sup>等を着実に重ねるなど、その経営手腕を発揮してきた。彼は、ウラジミール・ユロフスキ<sup>10</sup>を新音楽監督に指名して、ドイツ・バイエルン州立歌劇場のインテンドントに2021年に就任することが発表されたばかりである。リヨン歌劇場の次期インテンドントに誰が指名されるのか、それはルスティオーニとの関係もあつて注目されている。

今日のヨーロッパの歌劇場には、国と地域を越えて、オペラ劇場の運営に携わる人材が数多く存在する。フランスのストラスブール、ミュールーズ、そしてコルマルの3都市に、オペラとバレエ、さらに人材育成の拠点を持つフランス国立ラン歌劇場のインテندانティンは、ドイツ出身のエヴァ・クライニッツである。彼女は前任のシュトゥットガルト歌劇場のオペラ監督からの転身となった。2018年3月には、日本をテーマに「L' festival Arsmondoアルスモンド」を、ストラスブール大学等、地域の各組織と共に主催、自らのオペラ劇場では、黛敏郎作曲、宮本亜門

1 ダニエレ・ルスティオーニ Daniele Rustioni (1983～) ミラノ生まれの指揮者。

2 大野和士 (1960～) 指揮者。現新国立劇場オペラ部門参与。同部門の芸術監督に2018年9月就任予定。

3 アンドレア・バッティストーニ Andrea Battistoni (1987～) ヴェローナ生まれの指揮者。

4 ミケーレ・マリオッチ Michele Mariotti (1979～) ペーザロ生まれの指揮者。

5 イタリアを中心とした国々のオペラ劇場での上演方式。1つのプロダクション(演目)を1週間から10日程度の間、上演し続ける。

6 毎日異なる演目を上演する方式。ドイツ語圏を中心に、東欧にも広がるシステム。専属のソリスト歌手(アンサンブルと呼ばれる)等が出演することで可能となっている。

7 Intendant。Sovintendant、あるいは総監督 General Directorとも。オペラ劇場の運営、財政、芸術面等も含めた総責任者である。

8 セルジュ・ドルニ、Serge Dorny (1962～) 2021年シーズンから、ベルギー出身で初めてドイツのオペラ劇場のインテンドントに就任する予定。'Le Figaro Premium' 2018年3月11日版。

<http://www.lefigaro.fr/musique/2018/03/11/03006-20180311ARTFIG00108-munich-le-mercato-gagnant-de-serge-dorny.php#>、2018年5月5日取得。2018年の3月25日の《マクベス》上演時の実際の来場者の状況を見ても、観客層が若いこと、ほぼ満員といった観客の状況等が観察された。

9 2003年にインテンドントに就任してからの成果として、現在では入場率は平均90%にあがり、その観客のうち45歳以下が42%、26歳以下が25%となったとされている。Die Oper als Piazza, Bernhard Neuhoff, BR-Klassik-Redakteur, 2018年3月6日、<https://www.br-klassik.de/aktuell/news-kritik/serge-dorny-neuer-intendant-bayerische-staatsoper-portraet-100.html>、2018年5月5日取得。

10 ウラジミール・ユロフスキ、Vladimir Jurowski (1972～) モスクワ生まれの指揮者。

演出によるオペラ《金閣寺》のニュープロダクションを出したばかりである。プロダクションが国際的にも高い評価を得て、100%近い入場率を誇るエクサン・プロヴァンス音楽祭のインテンダントには、ベルギー出身のオルガニスト、ベルナル・フォクロール<sup>11</sup>がその任に長年就いている。

フランスだけではなく、その国の出身者以外が、各国を代表する大規模なオペラ劇場のインテンダントとして劇場経営の任にあたるという例は、枚挙にいとまがない。

ウィーン国立歌劇場のインテンダントはフランス人のドミニク・マイヤー<sup>12</sup>。ベルリン・コーミッシェ・オーパー<sup>13</sup>のインテンダントはオーストラリア出身の演出家、バリー・コスキー<sup>14</sup>である。コスキーが演出した《魔笛》は、世界各国で上演が重ねられている大ヒット作で、2018年4月に日本での公演が行われたばかり。この上演は、イギリスのクリエイター集団「1927<sup>15</sup>」による無声映画をモチーフにしたもの。背景映像に加えて猫などのキャラクターを登場させ、通常上演で物語を進めるために歌手達が語るセリフをほとんどカット、その多くを映像に委ねてストーリーを紡ぎ、音楽との接点をビビッドに描きだした。

さらに、イタリアを代表するオペラ劇場であるミラノ・スカラ座のインテンダントは、オーストリア出身のアレクサンダー・ペレイラ<sup>16</sup>。自身がザルツブルク音楽祭の芸術監督だった時代に共同制作した、ハリー・クプファー<sup>17</sup>演出による《ばらの騎士》や、同じくインテンダントを務めていたチューリヒ歌劇場のプロダクションで、これもクプファーによる《ニュルンベルクのマイスタージンガー》を上演するなど、イタリアを代表するオペラ劇場に「ドイツ語圏の風」を吹かせている。

また、ロシーニ二作品の研究上演を通じて、ベルカント・オペラを追求し続けているイタリア・ペーザロのロシーニ・オペラ・フェスティバルのインテンダントには、テノール歌手で教師、さらに今ではアーティストのエージェントを営むエルネスト・バラシオ<sup>18</sup>が2018年に就任した。彼は既に、2016年から故アルベルト・ゼッダ<sup>19</sup>前芸術監督の後を引き継いで、芸術監督の任にある。自らが育てた同じペルー出身のテノール歌手、ファン・ディエゴ・フローレス<sup>20</sup>のエージェントとしても知られている。

オペラ劇場を統率する人材としての彼らは、おそらくある程度、やすやすと国の違いを越え、さらに言語や民族の違いをも越えてその活動を続けてきた。これが結果として、文化の境界線をにじませている。実は、彼らこそが、今日のグローバル化するオペラを象徴する存在だとも言えるのだ。

## 1-2. 歌手、指揮者とオペラ劇場

政治や経済、地域社会との関係を構築しなければならないインテンダントに比べ、芸術に比較的集中できることもあって、当然のことながら歌手や指揮者等のアーティスト達の活動は一層国際的となる。彼らの活動を見ていくと、その登竜門の一つとなるオペラ劇場付属研修所の存在も浮き彫りになってくる。

11 Bernard Foccroulle (1953～) ゲント出身のオルガニスト兼アドミニストレータ。

12 Dominique Meyer (1955～)。仏・アルザス地方タン出身のアドミニストレータ。

13 ベルリンにある旧東独のオペラ劇場。ドイツ語上演を常としていたが、字幕システムの導入後、原語上演を取り入れつつある。ドイツ語、英語のほかトルコ語の字幕も出るようになったのは、移民の増加した現在のベルリンの人口構成を物語る。「アーティスト・トーク：演劇についての新たな考察 - ウルリヒ・レンツを迎えて」ゲーテ・インスティテュートでの公開トークより。モデレーター：石田麻子、2018年4月5日。

14 Barrie Kosky, (1967～) メルボルン出身の演出家。

15 演出家のスザン・アンドレイドとアニメーター&イラストレーターのポール・バリッドがロンドンに設立した団体。1927年は初めてトーキー映画が上演された年である。

16 Alexander Pereira (1947～) ウィーン出身のアドミニストレータ。チューリヒ歌劇場インテンダント、ザルツブルク音楽祭芸術監督を歴任した後、スカラ座のインテンダントに就任して現在に至る。

17 Harry Kupfer (1935～) ベルリン出身の演出家。

18 Ernesto Palacio (1946～) リマ出身。テノール歌手、声楽教師。アーティスト・マネジメントである Ernesto Palacio Artists Agent の代表でもある。

19 Arberto Zedda (1928～2017) ミラノ出身、ロシーニ・オペラ・フェスティバル前芸術監督。

20 Juan Diego Flórez (1973～) リマ出身のテノール歌手。

まず、イギリスの2つのオペラ劇場の最近のプロダクションを例にとってみよう。

ロンドンのロイヤル・オペラハウス、コヴェント・ガーデンで2018年3月に上演されたヤナーチェク作曲の《死者の家から》のチェコ語上演では、イギリス人指揮者マーク・ウィグレスワース<sup>21</sup>の指揮で、韓国人テノールのコヌ・キムが「声」役を務めた。彼は、2017年から、同劇場の若手アーティスト育成プログラムであるイヨット・パーカー・ヤング・アーティスト・プログラム（以下、JPYAP）<sup>22</sup>に所属する若手歌手10人の一人である。

スコットイッシュ・オペラ<sup>23</sup>で、2018年4～5月に行われたチャイコフスキー作曲の《エフゲニー・オネーギン》のロシア語上演は、2017年にロイヤル・オペラハウスのオペラ監督に就任したオリヴァー・メアーズ<sup>24</sup>によるプロダクションである。今回、オーストラリア出身の歌手サミュエル・デール・ジョンソン<sup>25</sup>がオネーギン役を務めた。ジョンソンは、2014–2016年にロイヤル・オペラハウスのJPYAPで研鑽を積んだ若手バリトン歌手で、現在では、ベルリン・ドイツ・オペラのアンサンブル<sup>26</sup>に所属している。

こうした状況を反映して、若手アーティストの人材育成にも国際化の波が押し寄せている。アーティストの教育環境の国際化は、現在のオペラ劇場の状況からすると当然のことである。また、そもそもボーダレスでなければ、今のオペラの世界地図から、かけ離れたものとなってしまふ。大学のみならず、オペラ劇場付属研修所等、各国の教育機関も、教師の側が能力的に国際的であるべきというだけでなく、受講生側も国際的で、使用される言語も、当該地域の公用語に加えて、英語でのコミュニケーションが前提となっている。

ロイヤル・オペラハウスのJPYAP、チューリヒ歌劇場の国際オペラスタジオ、メトロポリタン歌劇場リンデマン・アーティスト・プログラム等、各国のオペラ劇場が運営する研修所には、国籍や経歴等、多様なバックグラウンドを持つ若い歌手やコレベティウア達が集っている。オペラ劇場でのデビューを控えた彼らにとって、劇場の傍で切磋琢磨する付属研修所での研鑽は、直接デビューにつながる重要な機会となっている。

### 1-3. ダニエーレ・ルスティオーニとオペラ劇場

ダニエーレ・ルスティオーニは、ミラノのヴェルディ音楽院を卒業後、ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージックに留学、その後、ロイヤル・オペラハウスのJPYAPに、2008年から2009年まで所属、その後もたびたびアントニオ・パッパノ<sup>27</sup>のアシスタントとしてロイヤル・オペラハウスでのプロダクションに参加してきた。

彼は、トリノ王立歌劇場でのデビューの後、各国を代表するオペラ劇場やオーケストラを指揮している。最近では、メトロポリタン歌劇場2016/2017シーズン《アイダ》での指揮で話題となった。これは、クラッシミラ・スタヤノヴァ<sup>28</sup>、ヴィオレッタ・ウルマーナ<sup>29</sup>等の歌手達が出演したプロダクションである。

さらに、2017年ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティバル<sup>30</sup>では、同年のメイン・プロダクションであるピエール・ルイジ・ピッツィ<sup>31</sup>演出、脇園彩<sup>32</sup>が主演の《試金石》の他、《プルスキーノ氏<sup>33</sup>》も振った。2018年は、

<sup>21</sup> Mark Wigglesworth (1964～) イングランド、サセックス州出身の指揮者。

<sup>22</sup> Jette Parker Young Artists Programme. イギリスのロイヤル・オペラハウスが運営する、歌手を中心とした若手アーティストの育成プログラム。修了後、多くの歌手達が大手エージェントと契約するなどのキャリアを築く手助けをすることで知られている。

<sup>23</sup> スコットランドのグラスゴーに本拠を置くオペラ劇場。スコットランド政府から直接助成を受けている5つの芸術団体のうちの1つ。

<sup>24</sup> Oliver Mears (1979～) イギリス出身の演出家。ロイヤル・オペラハウスのオペラ監督に2017年3月に就任。

<sup>25</sup> Samuel Dale Johnson, オーストラリア出身のバリトン。

<sup>26</sup> Ensemble. オペラ劇場と、ソリストとしての専属契約を結んだ歌手のこと。主にドイツ語圏を中心にレパートリー・システムを取り入れるオペラ劇場でのシステム。

<sup>27</sup> Sir Antonio Pappano (1959～) イングランド、サセックス州出身の指揮者。両親はイタリア人。

<sup>28</sup> Krassimira Stoyanova, ブルガリア出身のソプラノ。

<sup>29</sup> Violeta Urmana, リトアニア出身のソプラノ。

<sup>30</sup> Rossini Opera Festival. 作曲家ジョアッキーノ・ロッシーニの生誕地であるイタリアのペーザロで、1980年以来開催されている。

<sup>31</sup> Pier Luigi Pizzi (1930～) ミラノ生まれの演出家、舞台装置家。

<sup>32</sup> 東京出身のメゾ・ソプラノ。

<sup>33</sup> 'Il Signor Brusichino' 2017年のペーザロでの上演には、カルメン・サントーロ Carmen Santoroがコレベティール（（独）歌手の個人練習の伴奏や助言を通じ、譜読みや発音矯正も含め、音楽への理解を深める手助けをする役割）として関わった。

3月にリヨン歌劇場で行われた「ヴェルディ祭」で、《ドン・カルロ》《アッティラ》《マクベス》を、その後、シュトゥットガルト歌劇場で《魔弾の射手》、トリノ王立歌劇場で《ドン・ジョヴァンニ》を指揮する等、各地の歌劇場や音楽祭から引く手あまたの状況にある。

オペラ上演、オーケストラ・コンサートでの着実な実績に加えて、CDやDVDも発売されている。近年では、2017年に発売されたベッリーニの最初のオペラ《アデルソンとサルヴィーニ<sup>34</sup>》のBBC交響楽団との録音は大きな注目を集めた。

## 2. 欧米の枠組みを越えて

### 2-1. オペラ劇場の世界地図が変わる(1)

オペラ劇場は、その国を代表する存在であり、街の顔でもある。しかし、オペラ劇場には今や、国境がないとも言える状況にある。それは前述のようにアドミニストレーション人材や歌手等のアーティスト達が中心的な役割を担いつつ、世界を行き来していることによる。加えて、社会や経済の状況も、オペラ上演のボーダレス化に拍車をかけている。

世界のオペラ劇場が注目している地域をご存じだろうか。

答えは、アジアである。それも、今や台風の目とも言えるような中心地が2つあるのだ。

1つは中近東で、それも砂漠の地域。そこにはいくつかの目の中心がある。

オマーン・マスカットの王立オペラ劇場は、1,100席を持つオペラ劇場で、2011年に、アレーナ・ディ・ヴェローナのプロダクションであるフランコ・ゼッフィレリ演出《トゥーランドット》で開場した。欧米のオペラ劇場から多くのプロダクションを招聘、毎月のように大型の公演が行われてきた。この他、アラブ首長国連邦のドバイに2,000席の大規模なオペラ劇場が建設されて上演が行われていて、さらに、サウジアラビアでのオペラ劇場の建設も発表されたところである<sup>35</sup>。

これまで、オペラ上演に関する蓄積を持たない中近東各国のオペラハウスの運営には、多くのヨーロッパ出身のマネジメント人材が関わっている。彼らの役割は、目下のところ、自らの人脈を駆使、ヨーロッパ各地のオペラ劇場の招聘オペラ上演を実現することにある。

オマーンの王立オペラ劇場のスケジュールをみると、2017年シーズンには、トリノ王立歌劇場がジャンアンドレア・ノセダ<sup>36</sup>の指揮で《アイダ》、アレーナ・ディ・ヴェローナが《夢遊病の娘》を上演する等、バレエやコンサート等、多数の海外招聘公演を行っていることがわかる。前任のドイツ人インテンダントが活動していた頃に比べると、現イタリア人インテンダント<sup>37</sup>の下では、オペラやバレエの大規模な公演は減少したと感じられはするものの、なお活発な活動を行っていると言ってよいだろう。

### 2-2. オペラ劇場の世界地図が変わる(2)

もう一つの台風の目は東アジアにある。

---

<sup>34</sup> 'Adelson e Salvini' 1825年作曲。ベッリーニ24歳の時に書かれた最初のオペラ作品。このCD作成にも、サントーロが副指揮者の役割に関わった。

<sup>35</sup> サウジアラビアの皇太子モハメド・ビン・サルマン Mohammed bin Salmanによる経済計画「ビジョン2030(Vision 2030)」が発表されたのにあわせて、General Entertainment Authorityによりオペラ劇場建設が発表された。新しいオペラ劇場は、パリ・オペラ座の協力を得る。サウジアラビア第2の都市ジェッダに2022年には完成予定とのことだが、具体的なスケジュール等は未発表。Sebastian Usher 'Saudi Arabia inks deal with France to set up opera and orchestra' BBCニュース、2018年4月9日付、<http://www.bbc.com/news/world-middle-east-43703236>、2018年5月5日取得。

<sup>36</sup> Gianandrea Noseda (1964～) ミラノ出身の指揮者。

<sup>37</sup> Umberto Fanni, ロイヤル・オペラハウス・マスカットの総監督、兼芸術監督。

中国と韓国、台湾には数々の大規模なオペラ劇場が建設され、そこにヨーロッパを中心としたオペラ劇場のプロダクションが数多く招聘され、公演している。

中でも、韓国は優れた歌手達を世界中のオペラ劇場に送り出してきた。それだけでなく、国内でのオペラ劇場の建設に加え、自力で、しかもアイディアに溢れたオペラ制作を行い、その豊かな発想で、オペラ制作に関しては、既にオペラ公演の歴史では先行していたはずの日本を追い越しているとも言える。とりわけ、ソウル市にある芸術の殿堂を拠点に活動している韓国国立オペラ団、世宗文化会館を拠点としているソウル市オペラ団による活動が知られ、国際的な共同制作にも加わる等、世界のオペラ制作ネットワークに着実にエントリーしている。

この他に、韓国・大邱市にあるオペラ劇場が活発な公演活動を行っていることも特筆すべきだろう。大邱オペラハウスは秋のオペラ・フェスティバルの際にはヨーロッパのオペラ劇場のプロダクションを招聘、大規模な上演を行っている。

この他、同オペラ劇場では、春に「オペラ・ユニヴァーシアード<sup>38</sup>」と題し、大邱市を中心とする地域の大学生に加えて、欧米各国のコンセルヴァトワール等から招聘した学生達が4名程度参加して上演が行われている。2018年3月には、《フィガロの結婚》が、ドイツ出身の演出家<sup>39</sup>により上演された。舞台は、「不思議の国のアリス」をモチーフに、トリプル・キャストの歌手達が全員出演、舞台上に縦横に積まれた4つの立方体の部屋それぞれで、各出演者が演技をシンクロさせている。その中で、歌唱するのは当日配役の歌手だけというアイディアである。当初歌手の負担を心配したものの、韓国、ドイツ、オーストリア、イタリアから参加した若い学生達が合唱パートをも分担して生き生きと演じ、物語を運んでゆく。全員顔を白塗りにして、人種の特徴を消し、スザンナはアリス、伯爵が帽子屋、マルチェリーナがトランプの女王の衣装や髪型で登場するなど、そのコンセプトは明快で、3月ウサギの登場による季節感もあって、実に小気味よい。

この他、35歳までの歌手達が登場するアカデミア公演も同じ月に行われ<sup>40</sup>、これにも世界のオペラ劇場付属研修所の若手歌手達が招待されて、プロダクションに参加している。

こうした韓国でのオペラ劇場が、世界に対して常にアピールし続けている状況を見るにつけ、日本でのオペラ制作をもっと世界に発信することの必要性を認識せざるを得ない。その際に、世界の標準、最前線のオペラのトレンドを掴まなければ、と強く思う。今回のワークショップは、若手歌手達に比較的近い世代の世界的な指揮者が、オペラの創造の最前線を示してくれる機会になるものと期待している。

(いしだあさこ 教授・舞台芸術政策論)

---

<sup>38</sup> 2018年3月8日～10日に大邱・オペラハウスで開催。科研費・基盤(C)「アジアにおけるオペラの実態構造と創造活動に関する研究」(研究代表者・石田麻子)により、現地調査を行った。

<sup>39</sup> Thilo Reinhardt、(1966～)。ツヴィッカウやカールスルーエ等のオペラ劇場での実績を持つ演出家。

<sup>40</sup> 2018年3月後半に《ラ・ボエーム》が上演された。

参考文献、および参考ウェブサイト

《フィガロの結婚》プログラム、大邱・オペラハウス。2018年3月9日。

Merlin, Christian, 'Munich, le mercato gagnant de Serge Dorny', 'Le Figaro Premium' 2018年3月11日版、<http://www.lefigaro.fr/musique/2018/03/11/03006-20180311ARTFIG00108-munich-le-mercato-gagnant-de-serge-dorny.php#>、2018年5月5日取得。

Neuhoff, Bernhard, 'Die Oper als Piazza', BR-Klassik-Redakteur, 2018年3月6日、<https://www.br-klassik.de/aktuell/news-kritik/serge-dorny-neuer-intendant-bayerische-staatsoper-portraet-100.html>、2018年5月5日取得。

Usher, Sebastian, 'Saudi Arabia inks deal with France to set up opera and orchestra', BBCニュース、<http://www.bbc.com/news/world-middle-east-43703236>、2018年5月5日取得。

参考シンポジウム

公開トーク「アーティスト・トーク：演劇についての新たな考察 - ウルリヒ・レンツを迎えて」主催ドイツ文化センター。モデレーター：石田麻子、2018年4月5日。



文化庁委託事業 平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業  
「日本のオペラ作品をつくる～オペラ創作人材育成事業」



## 第1回 公開講座

# 『アジアからの創作の潮流』 ～音楽と言葉と向き合うために～

2018年6月8日(金) 14:00開講 昭和音楽大学 南校舎 5F ユリホール

講師

イ・ゴニョン  
李建鏞  
(作曲家/

韓国「世宗カメラータ」創始者)



進行

中村 透  
(作曲家/

昭和音楽大学客員教授)



郡 愛子

(声楽家/日本オペラ協会総監督)

登壇



齊藤 理恵子

(演出家/劇団青年座)

音楽と手を携える台本との適切な距離とは。音楽と言葉と、さらにドラマとしてのオペラのあり方を問いかけたい～こうした思いを実現するためのプロジェクトを始動します。

人間の心理描写を通じて、オペラで現代社会のリアリティを映し出す～そのための作劇法と作曲技法を追求しながら、真のドラマづくりを目指す若い創造者達を育てます。プロジェクトのキックオフとして開催する第1回の公開講座では、本プロジェクトのファシリテータを中心に、韓国で先駆的な創作人材の育成活動を行っている「世宗カメラータ」の成果を把握したうえで、今後のプロジェクトの方向性を共有します。

**入場無料** (事前申込み不要)

お問い合わせ：昭和音楽大学 演奏センター TEL：044-953-9865

[受付時間] 10:00～18:00(平日12:00～13:00および土日祝を除く)